本市の全国学力・学習状況調査結果概要

令和５年11月

本調査の目的は、全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、各地域における児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、その成果を検証して学習指導の改善を図ることなどであり、平成19年度から文部科学省が実施しているものです。今年度の調査は、４月18日に悉皆で行われ、本市では、全校にあたる小学校13校（６年生525名）、中学校10校（３年生597名）が参加しました。

調査内容は、小学校が国語と算数、中学校は国語と数学に加え、英語が実施され、学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題が出題されました。また、調査する学年の児童生徒を対象とした学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する児童生徒質問紙調査と、学校（学校長）を対象とした指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する学校質問紙調査が実施されました。

本県の調査結果は、平成19年度の調査開始以来、連続して概ね良好な状況にあります。小学校、中学校とも全国の平均正答率をほとんどの教科で上回っています。一方、中学校において、英語の平均正答率が、全国の平均正答率をわずかに下回っている状況であり、全県的に英語においては、授業以外で、児童生徒が英語に触れる機会が少ないことがうかがえます。また、児童生徒質問紙調査及び学校質問紙調査の多くの質問項目で、肯定的な回答の割合が全国平均を上回っています。

本市小学校においては、国語が平均正答率で全国を上回り、算数がほぼ同じという結果となりました。国語は、特に言葉の特徴や使い方に関する知識・技能や文章の要点を見付け要約する力の定着が見られた一方、図表を使うなど書き表し方を工夫するなどして、自分の考えを書くことや図を用いて情報を整理するところに課題が見られました。算数では、特に「データの活用」の領域が全国を上回りましたが、求め方の理由や根拠を明確にして自分の考えを述べる力が課題でした。

本市中学校においては、国語と数学が平均正答率で全国を上回り、英語が全国を下回る結果となりました。国語と数学については、特に「思考・判断・表現」の力を問う問題の正答率が高く、全国を大きく上回りました。一方、国語は表現の効果を考えることや読み手の立場に立って自分が書いた文章を見直すこと、数学は用語の意味の理解に課題が見られました。英語については、複数の情報から必要な情報を読み取るところが全国を上回った一方、事実や自分の考えを整理し、まとまりのある文を書くことが特に課題でした。授業の中で、文と文のつながりを意識して書くことや言語活動を通して語彙力や文法事項の知識の定着を図ることが大切となります。

質問紙調査からは、小学校・中学校とも、将来の夢や目標をもち、自分自身を肯定的に捉えながら、学校に前向きに通っている児童生徒の割合が年々増加していることが分かりました。由利本荘市内の各学校における授業実践や先生方の関わり方が児童生徒によりよく反映されていること、保護者が温かく我が子に接していることが分かる結果となりました。その一方、1日あたりの学習時間は減少傾向にあります。また授業でのＩＣＴの活用については、昨年度よりも増加傾向にありますが、依然全国と比較すると大きく下回っている状況です。放課後の時間とＩＣＴのより有益な使い方について、さらに改善していく必要があります。

令和６年度の調査については、国語、算数・数学の２教科及び児童生徒質問紙について悉皆により実施されます。今後も、児童生徒の学びの状況を確認しながら確かな学力を育み、未来に向かってたくましく生きる力を身に付けさせることができるように、児童生徒一人一人に寄り添った指導の充実が一層期待されます。

全国及び秋田県の平均正答率一覧（今年度も、県の平均正答率は整数値で発表されています）

〈小学６年　平均正答率〉

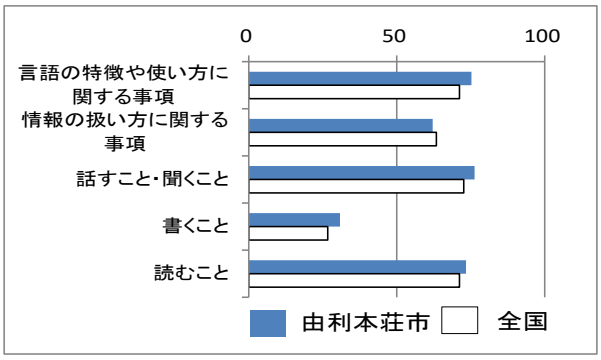
	国語	算数
秋田県	72	65
全　国	67.2	62.5

〈中学３年　平均正答率〉

	国語	数学	英語
秋田県	74	52	44
全　国	69.8	51.0	45.6

小学校国語について

＜小学校　国語（領域）の正答率＞



領域ごとの正答率を比べると、４領域で全国平均を上回っています。特に、「言語の特徴や使い方に関する事項」や「文章の要点を見付け要約すること」に関しては基本的な言語能力の定着が見られます。

一方、「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」や「情報と情報との関係づけの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと」については課題が見られますので、指導を一層充実させることが必要です。

【図表を用いて自分の考えを伝える】

事実を記述する際は、図表やグラフを用いることで考えを深めやすく、読み手にとっても理解しやすいものとなります。

図表等を用いた文章を書く際は、資料から読み取れる事実と、そこから考えられることを明らかにするよう指導することが大切です。また、お互いの文章を読み、目的や条件に沿った内容になっているか評価し合う活動を設定すると効果的です。

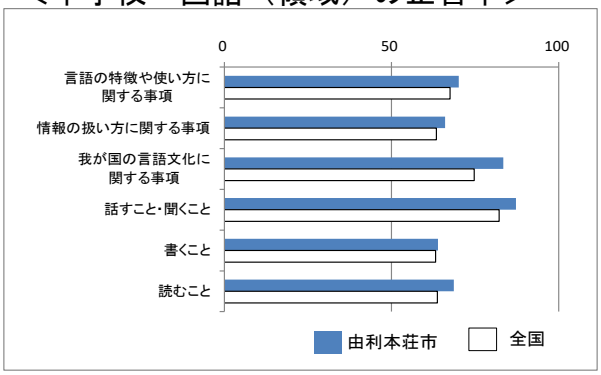
【情報や語句を関係付けて整理する】

文章を読むときは、使われている言葉に着目し、情報と情報のつながりを捉えることが大切です。

授業では、複数の語句を丸や四角で囲んだり、語句と語句を線でつないだりするなど図示する活動を意図的に設定することが重要です。考えがより明確になったり、思考をまとめたりすることが実感できるよう指導すると効果的です。

中学校国語について

＜中学校　国語（領域）の正答率＞



領域ごとの正答率を比べると、全ての領域で全国平均を上回っています。特に、「話すこと・聞くこと」は正答率の高い設問が多く、効果的に話したり、聞いたりするための基本的な知識・技能の定着が見られます。

一方、「書くこと」の「読み手の立場に立って文章を整えること」や「読むこと」の「表現の効果について考えること」については課題が見られますので、指導を一層充実させることが必要です。

【読み手の立場に立って推敲する】

自分の書いた文章を見直す際は、読み手の立場に立って、伝えようとする内容が十分に書き表されているかどうかを検討することが必要です。

授業では、語句の選び方や使い方、段落構成など観点を明確にした上で推敲する時間を十分に確保することが大切です。また、ペアやグループでお互いの文章を評価し合う活動を設定すると効果的です。

【表現の効果について考える】

表現の特徴や効果について考えるためには、着眼点（簡潔な述べ方と詳細な述べ方、断定的な述べ方と婉曲な述べ方、敬体と常体、表現技法等）を押さえておくことが大切です。

授業では、一つの文章を読むだけではなく、複数の文章を読み比べ、注目する部分を焦点化して、その効果を話し合う活動を設定すると効果的です。

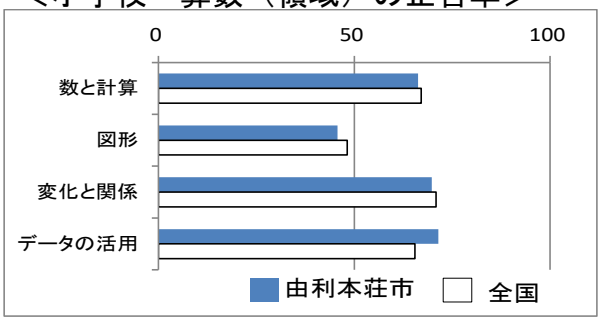
質問紙調査から＜国語の学習について＞

国語の学習については、小・中学校全ての項目で「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計が、全国の数値を上回っています。特に95％前後の児童生徒が「国語の勉強は大切だ」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」と答えており、児童生徒が国語学習の有用感を実感しながら、資質・能力を身に付けられるような授業実践が行われていることがうかがわれます。

今後も、児童生徒が国語学習を通して達成感を得られるよう「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、授業改善を推進していくことが望まれます。

小学校算数について

＜小学校　算数（領域）の正答率＞



平均正答率を見ると、データの活用の領域で全国平均より高い数値を示しており、また、観点別では知識・技能において、問題形式別では選択式において全国平均を上回っています。

「変化と関係」の「割合の意味を理解すること」、「図形」の「三角形の面積の大小を説明すること」については課題が見られますので、指導をより一層充実させることが必要です。

【割合の意味を理解する】

100をもとにした30の割合が0.3であり、30％と表すことができるという基本的な知識の定着が大切です。

また、実人数、割合、百分率の値の示す意味や使い分け方への習熟が必要です。もとにする量、比べられる量を明確にし、○人をもとにした△人、□円をもとにした☆円など、身の回りの数量を取り上げることで定着を促すことができると考えます。

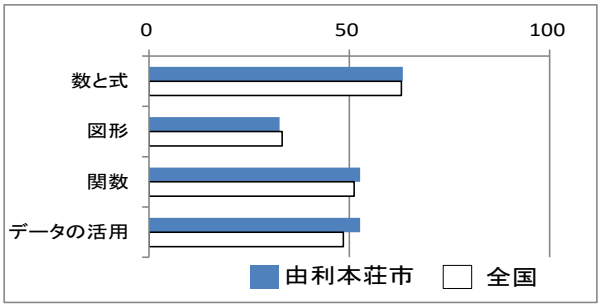
【三角形の面積の大小を説明する】

２つの三角形の面積を比較するためには、以下の３点を確認することが大切です。

１つ目は、三角形の面積は底辺と高さ２つの要素から決定されるということ、２つ目は、底辺と高さが垂直の位置関係であること、３つ目は、底辺や高さの関係を、実際の数値や図の条件から比較することです。誤答の理由を分析して復習に取り入れることで定着が進むと考えます。

中学校数学について

＜中学校　数学（領域）の正答率＞



平均正答率を見ると、図形でわずかに下回っているものの、３領域では全国平均より高い数値を示しています。観点別では思考・判断・表現が、問題形式別では、短答式、記述式で全国平均を上回っています。

「数と式」の「自然数をすべて選ぶこと」、「図形」の「三角形の合同を基にして証明すること」については課題が見られますので、指導をより一層充実させることが必要です。

【自然数をすべて選ぶ】

自然数が「整数である」ことはつかんでいますが、正確に「１以上の整数（正の整数）である」ことが定着していないと考えられます。

正解とほぼ同数の生徒が「０」を含め、また、一部の生徒が「－５」も選択しています。中学校数学の定義では０は含まないので、個数を数えるときに「０個」と数えないことなど、日常生活を想起させることも有効と考えます。

【三角形の合同を基にして証明する】

証明の記述で大切にしたい点は、以下の２点と考えます。

等しい、平行であるなどの判断には、適切な根拠（定理や性質等）が必要であり、式による等しいことの記述とともに、錯角などのキーワードを記述に盛り込む必要があります。また、２つの三角形の合同を示す場面だけが証明ではないので、合同を根拠に導き出せるものに目を向ける場面の設定も有効と考えられます。

質問紙調査から＜算数・数学の学習について＞

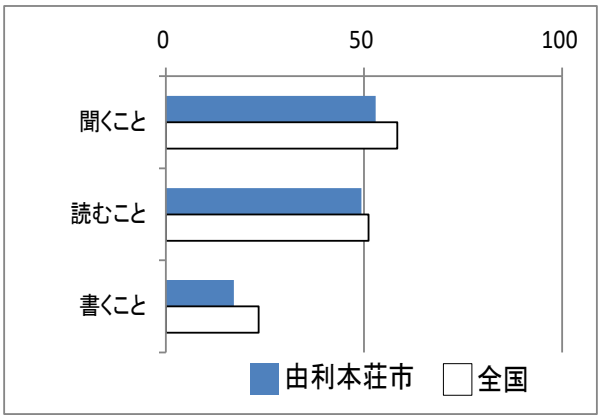
算数・数学の学習への意識については、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計が、小・中ともにすべての設問において全国の数値を上回っており、望ましい状況が継続しています。小学校では「数学は将来社会に出たときに役に立つ」の設問で、96％を超える回答となっています。中学校では、「数学の勉強が好き」「数学は将来社会に出たときに役に立つ」の設問で、全国平均より+10ポイント以上となっています。今後も、授業において数学の有用性や楽しさを実感させ、主体的に学習に取り組む態度を育てることが大切です。

今後も引き続きＩＣＴ機器を有効活用することで、主体的・対話的な学び、個別最適な学びへとつながる授業改善を継続することが求められます。

中学校英語について

「読むこと」の「自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を読み取ること」や「短い文章の要点を捉えること」は全国平均を上回っていますが、「聞くこと」「書くこと」については、全国平均を下回る結果となりました。特に、「書くこと」の「短い文章の要点を捉えて、考えとその理由を書くこと」や「事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文を書くこと」に課題が見られますので、指導の一層の充実を図ることが必要です。

＜中学校　英語（領域）の正答率＞



【情報を正確に聞き取る】

情報を正確に聞き取るためには、音声や語彙、表現、文法などの言語の働きを理解し、それらを実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることが必要です。自然な速さで話される音声を聞いて、英語特有のリズムやイントネーションに慣れる活動や、意味のまとまりを意識しながら区切って聞いたり音読したりする活動を継続的に行うことが効果的です。

【目的に応じて英語を聞き、必要な情報を聞き取る】

自分が必要とする情報は何かを把握し、それらに関連する語句や表現に着目して聞き取ることが大切です。授業において、コミュニケーションを行う目的や場面、状況を明確にした言語活動を設定し、その中で全てを聞き取るのではなく、目的に応じて情報を取捨選択していくことができるよう指導することが必要です。

【社会的な話題について、自分の考えとその理由を書く】

社会的な話題について書かれた文の内容を理解した上で、それに対する感想や賛成・反対などの自分の意見をもち、その根拠を明確にすることが必要です。意見と根拠の関係を明らかにし、読み手に分かりやすく書くことができるよう、授業において、書いた英文に教師がフィードバックを与えたり、全体の場で良い表現等を共有したりするなど、内容や表現を改善する場を設定することが効果的です。社会的な話題については、教科等横断的な視点をもち、他教科との関わりも意識しながら多面的に指導することが大切です。

【事実や自分の考えなどを整理し、まとまりのある文を書く】

よりよく読み手に伝わるように文と文のつながりを意識して構成を考えながら書くことが大切です。まとまりのある文を書く力の定着のために、読むことの活動を書くことの活動につなげた指導を行うことが効果的です。また、伝えたい内容を正しく伝えるために、言語活動を通して語彙力や文法事項の知識、内容や表現の適切さを判断する力の定着を図る必要があります。小学校からの学習のつながりを意識した中学校での年間指導計画、単元計画を作成し、系統性のある指導をすることが大切です。

質問紙調査から＜英語の学習について＞

「英語の勉強は大切だと思いますか」という項目では、90％を越える生徒が「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答しており、「英語の勉強は好きですか」という項目では、約60％の生徒が肯定的な回答をし、どちらの項目も全国平均を上回っています。英語学習の重要性を感じるとともに、英語に興味や関心をもちながら学習に取り組めるような言語活動の工夫が行われていることがうかがわれます。その一方で、「まとまりのある文を書く問題について、どうように解答しましたか」という項目については、70％を超える生徒が、「書く内容は思い浮かんだが、その内容を表現する英語が思い浮かばなかった」と回答しています。

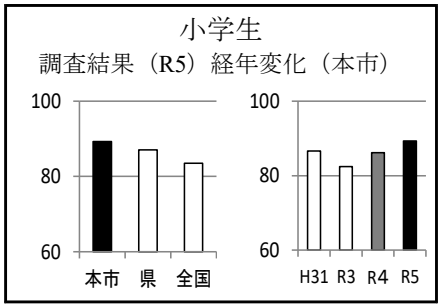
今後は、表現したい内容を正確に伝えるために必要な知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいての活用と思考・判断・表現することの繰り返しを通して習得されるよう、指導の一層の充実を図ることが必要です。

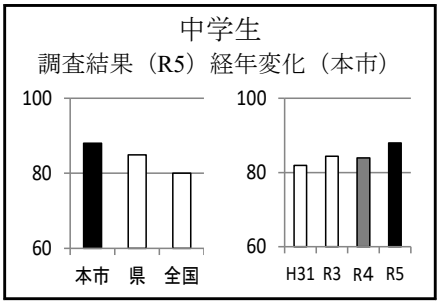
児童生徒質問紙について

質問紙調査は、小学校59項目、中学校72項目あり、学習習慣、生活習慣等幅広く質問されています。その中で注目すべき項目や今後に生かせる項目について掲載しました。なお、この調査では小学校６年生、中学校３年生が回答しています。

１【自分には、よいところがあると思いますか】

質問番号（４）　　**《当てはまる、どちらかといえば、当てはまる割合》**

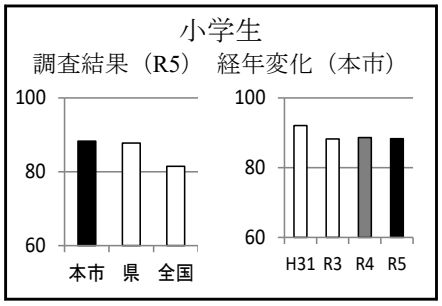


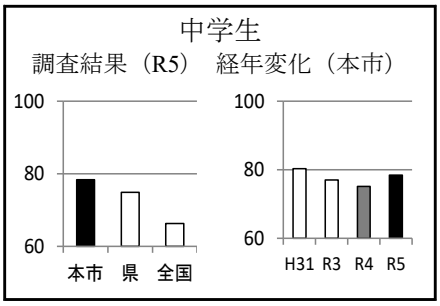


継続的に本市の課題とされてきた項目ですが、今年度、小学生は89.3%、中学生は88.0%が「自分にはよいところがあると思う」と回答しており、ともに昨年度よりも高くなっています。また、全国平均や県平均を上回りました。これは、道徳教育が充実し、さらに様々な体験活動が少しずつ再開されたことで、児童生徒が自分を見つめ直したり、自分のよさを生かし活躍する場が増えたりしたことの成果と考えます。今後も、学校生活全体を通して、自己有用感をさらに高めることができるよう、児童生徒が互いを認め合い、高まり合うことができる学級・学校づくりや学習活動の展開等を工夫し、支援を継続していきたいと考えます。

２【将来の夢や目標を持っていますか】

質問番号（７）　　**《当てはまる、どちらかといえば、当てはまる割合》**

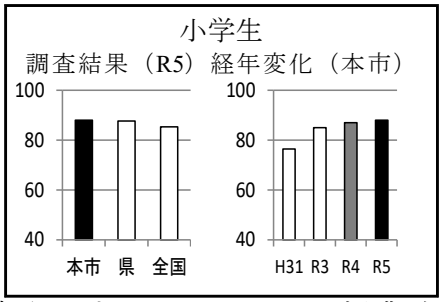


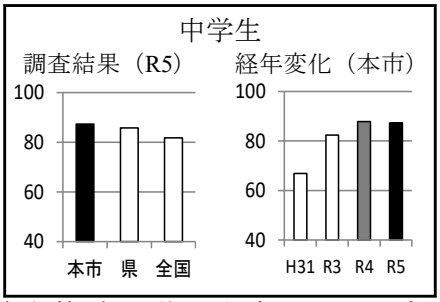


小学生の88.3%、中学生の78.4%が将来の夢や目標をもっており、全国平均と県平均を大きく上回っています。校外学習や職場体験、ふれあいＰＲ事業などキャリア教育に関する様々な活動が再開される中で、地域の方々と触れ合い、ふるさとのよさを見つめ直したり、将来の生活について考えたりする機会が増えたことによる成果と考えます。また、小・中学校を通じて、キャリアノートを活用し、自分の経験や思いを綴ったり、成長を振り返って記録したりする活動を蓄積していることも結果に結びついているものと思われます。今後も、将来の夢や目標をもち、それに向かって主体的に行動したり努力したりする態度を育んでいくことが求められます。

３【学校に行くのは楽しいと思いますか】

質問番号（12）　　**《当てはまる、どちらかといえば、当てはまるの割合》**

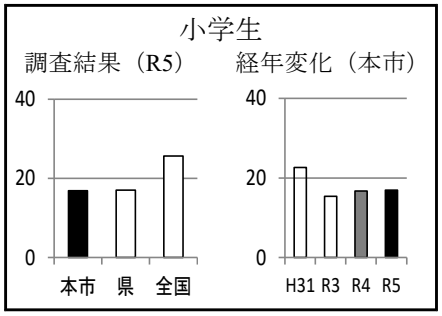


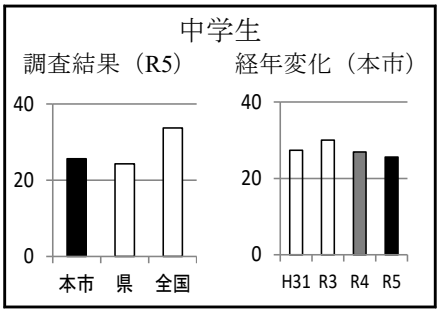


小学生の88.0%、中学生の87.3%が学校生活を楽しいと感じており、経年変化を見ても大きく変わりありませんでした。各学校で定期的な面談やアンケートを実施し、児童生徒の実態を的確に把握したり、一人一人に寄り添う指導をしたりしていることによる成果と考えます。また、日々の授業改善や体験活動の充実により、児童生徒の活躍の場面を増やし、互いのよさを認め合える学級づくりも、結果として表れていると思われます。今後も、一人一人が個性を発揮し、生き生きと活動できる環境を整えたり、学習内容を工夫したりしながら、より多くの児童生徒が「楽しい」と実感できる学校・学級づくりに努めていきたいと考えます。

４【学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む)】

質問番号（17）　《３時間以上、２時間以上３時間より少ないの割合》

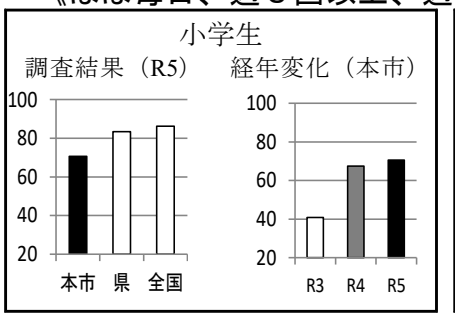


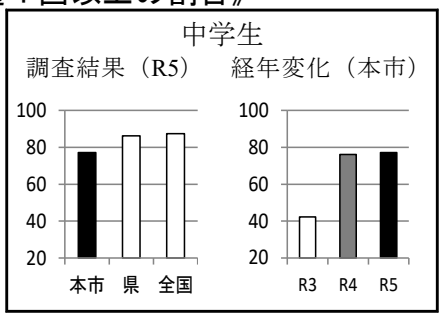


授業以外で２時間以上学習している小学生の割合は16.9%、中学生の割合は25.6%で、昨年度と比較しても大きな変化は見られませんでした。また、小・中学校ともに全国平均を下回っています。一番割合が高かったのは、小・中学校ともに「１時間以上２時間より少ない」勉強時間で、およそ50%を占めています。家庭での学習を振り返る機会を意図的に設定するとともに、今後も児童生徒の実態に応じた学習方法や内容を指導していく必要があると考えます。同時に、余暇の過ごし方を含め、家庭での時間の使い方について保護者面談や学校・学級通信等で話題にしながら、保護者に協力を呼びかけていくことも求められます。

５【５年生までに（１・２年生のときに）受けた授業で、ＰＣ・タブレットなどのＩＣＴ機器を、どの程度使用しましたか（Ｒ３からの質問事項)】

質問番号（29）(33)　《ほぼ毎日、週３回以上、週１回以上の割合》

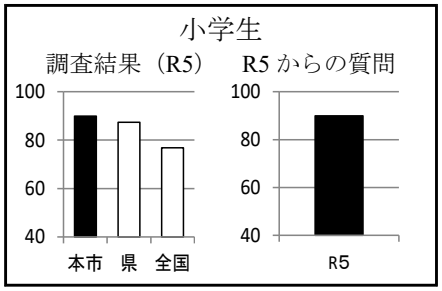


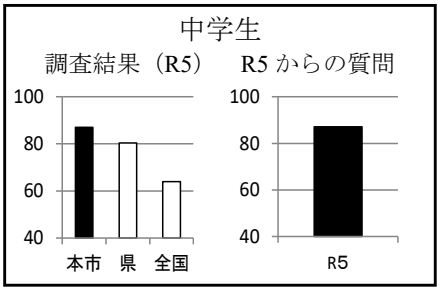


小学生の70.6%、中学生の77.2%が昨年度まで受けた授業で、週１回以上ＩＣＴ機器を使用したと回答しています。昨年度と比較するとやや高くなったことが分かります。また、本質問のＩＣＴ機器をＰＣ・タブレットのみの使用と捉えて回答した児童生徒もいることが予想され、電子黒板や書画カメラ等の使用を含めると、実際にはこの結果よりも高い数値になることが推測されます。各学校での積極的なＩＣＴ機器の活用が結果として表れました。市でも授業におけるＩＣＴ機器の効果的な活用に関する研修会を実施しております。今後も、校内、また学校間で情報交換をしながら、個別最適な学びや協働的な学びにつながる実践を蓄積していくことが大切であると考えます。

６【地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか】

質問番号（30）　《当てはまる、どちらかといえば当てはまる割合》





各学校にコミュニティ・スクールが設置されて地域や学校の実情に応じたふるさと教育が展開されていることもあり、小学生の89.9%、中学生の87.1%が地域や社会のために何かしてみたいと思っていると回答しています。小・中学生ともに、全国平均と県平均を上回っています。日々の授業や学校行事などで地域の方々に支えていただいていることに感謝しながら、支援が一方通行にならないように、この結果を生かして「地域や社会のために自分たちができることは何か」を考え、実践できる子どもを育てていくことが大切と考えます。今後も、カリキュラム・マネジメントを基盤とした教育課程を工夫し、地域が核となる学校づくりを目指していきたいものです。